

塩の辛さ、砂糖の甘さは学问では理解できない だが、なめてみればすぐ分かる

校長 二瓶 亮

「今 負けないで 泣かないで 消えてしまいそうな時は～」「僕らの出会いを誰かが別れと呼んだ～」「友 進むべき道の先に どんなことが待っていても～」爽やかな秋空の下、11月1日(火)に行われる音楽祭に向けて北校舎や体育館から素敵な歌声が響いてきます。校長室に届くその歌声にグッと心をつかまれ、ひととき「やっぱり歌はいい、合唱はいいな」と感慨に浸っています。



それでもコロナ禍にあって練習時はマスク着用でお願いしてきました。「練習の時から思う存分、歌って欲しい」という思いと「クレアこうのすで全学級が参加して行う音楽祭にしたい」という思いに揺れながらここまで来ました。音楽祭を迎えるに当たっても我慢と制約の中での取組となっていました。それでも練習を終えた生徒たちの顔には充実感が見られます。ぜひ、御家庭で話題にさせていただき、生徒たちを応援していただきたいと思います。

さて、学校において子ども達の学びが深まり、知識や生きる力が身に付く場面といえば授業で「分かった」「できた」という実感を伴った瞬間だと感じます。さらに中学校では、生徒会活動や学校行事、部活動などの「実体験」を伴った活動を通してこれから先の人生を豊かにするためのコミュニケーション能力や折り合いを付ける力(人間関係調整力)を身に付けさせたいと考えています。今、取り組んでいる音楽祭に向けての活動もそれに当たります。

タイトルにある言葉は「体験」することの大切さを表現したもので、この言葉は、世界的にも有名な家電メーカー「パナソニック」の創業者である松下幸之助氏(1894年～1989年)の言葉です。松下氏は、決して恵まれた環境ではなかった中で、会社を一から作り一大家電メーカーに成長させたので「経営の神様」とも呼ばれています。松下氏の活躍の秘密はたくさんありますが、先程の言葉もその1つです。塩や砂糖は見ただけでは、その辛さや甘さは分かりません。頭の中で考えるのではなく、まず自分で一口なめてみる。自ら味わってみて初めて塩や砂糖というものが分かります。そのような体験を通して初めて物事が分かること、体験することの大切さを松下氏はわたしたちに教えてくれます。実際に自ら体を動かして活動して、振り返り、考えることが学習でも仕事でも大切だということです。

吹上中学校の強みの1つは学校行事に生徒も教員も全力で取り組むことだと感じています。制約や制限のある中ですが、学習と同様、成功や失敗も含めた体験の積み重ねによって、一人一人の生徒が将来の夢をもつことにつながるような教育活動を進めていきたいと考えます。音楽祭の後も2年生は上野・浅草方面の校外学習、1年生は菅平高原でのスキー教室などの大きな行事が企画され、その取組を通してまた一つまた一つと体験を積み重ねていきます。これからも生徒の学びの場、体験の場を作り、実感を伴いながら心も体も、そして多様性にも対応する見方・考え方ができる吹中生を育てていきたいと考えます。今後も、できる限りリスクを抑えながら教育活動を展開していくため、保護者の皆様には引き続き御理解、御協力を、併せて感染予防対策の徹底をお願いいたします。